はじめに

茶湯成立については、これまで多くの研究者によって論じられてきた。水屋仕事であった点茶を客前で行うようになった経緯や、同時代の茶会記の研究などで、成立期の茶湯はかなり明らかになったといえよう。

しかしながら茶湯成立後、近世の茶湯の変遷についての研究は未だ不十分な点が多くある。先行研究としては、谷端昭夫氏が『近世茶道史』で人物を中心とした茶道史を論じているが、茶会や点前伝授の実態についての研究は、神津朝夫氏の『茶の湯の歴史』などにより近年始まったばかりである。

茶湯の具体的な実態の変遷については論じられることが少ないため、現在の茶湯と成立期の茶湯の間には大きな空白がある。茶湯伝承の現状において、その空白を無視し、現行の茶湯の根本を成立期と結びつけようとすることが多くみられる。当然の如く無理が生じ、また誤解も生まれる。

本研究は、茶湯成立後の近世の茶湯の変遷をより具体的に明らかにすることで成立期と現在の茶湯の間の空白をつなげることが大きな目的の一つである。

更に、その変遷にある根本的思想とはなんであったのかを探究したい。

本論文は序章と５章から構成されている。目次と、各章の要旨を以下に記す。

目次

序章
一、先行研究
二、点前・作法研究の必要性
三、本研究の目的と方法

第一章　茶会の多様化
一、茶会の様相
ａ、時刻
ｂ、床かざり
ｃ、前礼・後礼
ｄ、服装
二、大寄せ茶会の成立
ａ、大人数の茶会
ｂ、連日の茶会
ｃ、流儀行事としての茶会
三、茶会と茶事の分離
ａ、茶の事
ｂ、江戸末期の「茶事」
ｃ、大規模茶会と茶事の区別
四、茶会における新たな観念

ａ、茶会と陰陽五行
ｂ、独座観念
小括

第二章　真行草による点前の体系化
一、台子点前
ａ、真・行・草の区別
ｂ、『草人木』と『和泉草』
ｃ、千家の台子
ｄ、台子の体系化
二、運び点前の体系化
ａ、初期の運び点前
ｂ、運び点前の発展
ｃ、真行草による点前の体系化
三、使用する道具の格付
ａ、茶書にみる道具の体系化
ｂ、茶杓の分類
ｃ、真行草による分類の一般化
四、点前に対する新たな観念
ａ、点前と陰陽五行
ｂ、台子点前における「乱れ」について
小括

第三章　炭手前の定式化
一、炭手前の成立
ａ、炭手前以前
ｂ、拝見対象としての「炭」
ｃ、炭所望と廻り炭
二、炭手前の形式
ａ、三炭成立以前
ｂ、初炭・後炭・立炭
三、炭手前に対する新たな観念
ａ、日常としての「炭」と一会のための「炭」
ｂ、初炭
ｃ、後炭
ｄ、立炭
四、炭手前の展開
ａ、炭所望
ｂ、廻り炭
ｃ、風炉の炭
小括

第四章　好み道具の普遍化
一、茶書にみる「好み」
ａ、『山上宗二記』
ｂ、『松屋会記』
ｃ、江戸時代中期の茶会記
ｄ、『不白筆記』
二、「形」と「写し」
ａ、「形」の意味
ｂ、利休形
三、「数物」の出現とその背景
ａ、名物に代わる道具として
ｂ、作意から統一へ
ｃ、七事式式制定による道具の規定
四、「好み」と美意識
ａ、茶の湯の形態の変化
ｂ、趣向の重視
小括

第五章　思想の深化
一、初期茶の湯における思想
ａ、茶の湯者への啓蒙
ｂ、名物所持と侘数寄
ｃ、茶の湯者としての覚悟
二、禅との関係
ａ、下学上達と坐禅修行
ｂ、点前修行
ｃ、『不動智神妙録』の影響
ｄ、『禅茶録』
三、陰陽五行
ａ、『南方録』の出現
ｂ、陰陽五行の広がり
四、茶禅一味の根本
ａ、清者の業
ｂ、二方向の修行
ｃ、清者からの却来
ｄ、茶味禅味同一味の根本
ｅ、新たな茶禅一味
小括

結語

一、今後の茶の湯への展開
二、今後の研究と課題
資料
史料・著書・論文

第１章　茶会の多様化

茶湯成立期より、茶会は初座・後座の二部制であり、懐石料理があり、露地での中立を挟んで再び席入り後、濃茶と薄茶という形式であった。そのような基本的形式はあったものの、炭手前は火が落ちれば行うのであり、湯が沸くのを待ち、時に応じて自由な趣向により茶会が行われていた。次第に炭手前も含めていくつかの茶会形式として整えられ、茶事七式の基となった。また、前礼・後礼などの挨拶や服装なども茶会に際して心得るべき要素となった。

客は一人から数人が基本であった。大人数を一度に招く会も皆無ではなかったが非常に稀であったといえよう。江戸時代を通して、大人数を茶会に招くばあいには少人数に分けて連日茶会を行っていた。江戸中期には家元による遠忌の茶会が大規模かつ組織的に行われたが、やはり連日行う茶会であった。しかし幕末から明治・大正にかけて、略式のいわゆる大寄せ茶会が広く行われるようになる。

正式な茶会は大寄せ茶会と別して「茶事」と称するようになった。茶事の形式は洗練されまた整えられ、その内容や順序がはっきりと提示された。そして、格式高いものと位置付けられるに至り、縁遠いものとなった。茶事は、決められた形式を尽くすことが目的となり、独自の作意や手工もその形式の中でのみ行われるようになった。

洗練された茶会の形式ではあるが、形式にとらわれすぎると「独座観念」にみるような心を見失いがちである。形式から離れたとしても、その時々の臨機応変な工夫をこそ是とする自由を取り戻さなければならないのではないか。

第２章　真行草による点前の体系化

貞享四年（一六八七）の『和泉草』では、台子点前が真行草により整理されており、伝授の段階が整えられていた。宝暦七年（一七五七）以降成立の『不白筆記』では、真台子とその他台子以外の点前も組み込んで、真行草で分類した。台子だけではなく運び点前も、意味合いを整理したり新たな点前を加えて「小習事」とし、伝授の体系が段階的に整えられた。

また幕末から明治、裏千家十一代玄々斎によって台子十二段が整えられたと考えられる。玄々斎は茶杓の削り方についても真行草を組み合わせていくつかの段階に分類したとみられ、それらを台子の段階に合わせて使いわけた可能性もあるだろう。その後、花入や炉縁、軸の表装や風炉など、多くの道具類が次々と真行草で分類されるようになっていった。

点前は真行草により段階的で明確な伝授が行われようになり、また点前に際しての道具の取り合わせの仕様についても、真行草で格付けを行うことでより分かりやすく整理することとなった。また新たに陰陽思想や「乱れ」といった観念が、点前に対して見出された。

しかし、全ての点前に陰陽思想を当てはめようとしたり、全ての点前の根本を奥伝の台子に見出そうとする風潮によって、点前によっては本来の意味を見失ってしまうことになる。

第 3 章　炭手前の定式化

水屋仕事であった「炭」は、手前として成立した。その背景には、巧者に「炭」を所望する「炭所望」がその一端を担ったものとみられる。文禄に入ると『松屋会記』に「まわり炭」の記述がみられる。各人それぞれの炭手前を交代しながら行ったとみられ、茶湯者たちのなかに、「炭」を客前で行うことがすでに根付いていた。すなわち天正年間に、形式はさまざまであるが客前で「炭」を行うことが広がり、文禄年間には、炭手前が確立していたとみることができる。

また利休時代より、茶湯者は一日中常に釜を掛けていることが求められていたが、江戸前期には、「常に釜を掛けている中での一会」と、「一会のための釜」の両形式がみられるようになる。次第に「常に釜を掛ける」ことの実践から遠ざかると同時に、一日の「炭」が一会に凝縮されるということが起こり、茶会の中での「三炭」が確立する。そこにはそれぞれに新たな観念が見出されていった。ぬれ釜を尊ぶこと、炭の流れに風趣や仏法の心持をみること、客をいつまでもとめる心、などである。

「炭」が手前として成立すると、道具の位置や所作、灰の蒔き方や炭のつぎ方などが定まった。そして「初炭」「後炭」「炭所望」「廻り炭」などといった習い事として位置づけられるに至った。

炭手前の変遷は茶会の変遷に呼応するものである。茶事形式に定められた通りに火勢と湯相を制御し調節するのは炭手前の技術だが、火勢が弱まれば時に応じて行う本来の「炭」を、もう一度茶事中に取り込めば、炭手前だけではなく茶事も、豊かな表現を見せることができるであろう。

第 4 章　好み道具の普遍化

「好み」の語は茶の湯において独特の意味をもって使われる。茶書・茶会記から「好み」の変遷をみてみると、初期の茶湯では日用品などから茶道具として見出す、見立てる、という意味で「好み」が使われると同時に「ある人の意匠・価値観・美意識によるもの」といった意味でも使われていた。江戸時代中期の享保年間になると、対象となる茶道具の範囲がかなり広くなり、『不白筆記』になると、あらゆる茶道具を「好み」で分類するようになった。この頃、今日の「好み物」に近い意識が成立したといえよう。

また、道具の形状にかかわる「好み」であった「形」は、特定の人の意の匠という意味で使われていたが、この「形」を「写す」ということが行われ、「一品物」から「数物」へと拡大していった。また、「利休形」については利休への敬慕や利休の神聖視といった背景により、特に重要視され、種類が増加していったと思われる。

さらに、茶道人口の増加と家元制度の成立が、茶道具に対する価値観にも大きな影響を与えた、今日的な意味での「好み物」が定まったといえるだろう。

このように、茶湯の中で「好み」はその意味に大きな変化をみせながらも、茶湯を牽引する動力として大きな役割を果たし、現在に至った。

流儀茶道では創意よりも統一が必要であったという事情があったためであるが、現在では、三百年前のような各茶人の「作意」や「好み」は喪失しており、現在の「好み」はその意味に明らかな違いが生じている。好み物である、といういわば肩書きが重要視されることにより、道具そのものに対する個人の主観が弱体化したといえないか。好み道具に限らず、箱書きに頼る目利きが主体となってきていることからも明らかであろう。喪失したのは「見出す茶湯」といってもいい。「見出す茶湯」によって新しき茶道の創造に竿頭一歩を進めることを考えるべきなのではないか。

第５章　思想の深化

茶の湯は成立期より「道」としてとらえられ、高い精神性をもって語られた。高い境地に至った心をもって、名物所持の茶の湯や侘数寄の茶の湯にその姿をあらわそうとしたといえる。

『山上宗二記』の頃になり、茶の湯と禅の関わりが強調されるようになった。江戸初期に至って、日々の生活の中に茶湯者としての有りようを律するいわば下学上達の修行が家業等のために困難であるため、茶室から離れた禅の修行によって心を高めその精神を茶の湯に反映させるという茶の湯と禅の関係が出来上がった。以降、近世の茶の湯における思想には、一貫して禅が根本にあり、禅との関わりを抜きにして論じることはできない。

江戸中期、『不白筆記』では、決められた形を崩さないことが強く求められた。その上で、『不動智神妙録』の教えである、どこにも止ることのない禅的悟りの境地を求める点前修行を行うことを目指した。同じように『禅茶録』では、点前をすることと座禅修行とを同様にとらえるという方向からの点前修行を説いた。

つまり、いわゆる「茶禅一味」は、禅の教えをもって茶湯に表そうとする方向と、点前を行うことによって禅の悟りを得ようとする方向の、二通りに発展したといえる。

「茶禅一味」は、言葉としては新しいが、『烏鼠集四巻書』における「清者の業」に根本的思想の一つをみることができる。ここでは徹底的に「心の掃除」を求めたのであり、煩悩を捨てようとする禅と自然に結びついたであろう。自らの心を高めるという目的において、茶の湯と禅は合致した。しかしこれは、神秀上座のいう「時々勤払拭」つまり向去の段階である。『山上宗二記』では、はっきりと禅を打ち出し、その先の、六祖慧能のいう「何處惹塵埃」つまり却来の段階までを求めた。

茶室を清め、露地を清め、また点前中においても、道具を清めない点前は存在しない。徹底したこの具体的「清」は、内面的清らかさを持つ「清者」につながる。このいわば茶湯的清者は、禅的覚者と結びつき、茶湯を通じた禅的修行、また禅を通じた茶湯修行を行うに至ったといえよう。

茶湯は究めるべき道の修行であるという根本を有しているわけだが、それは当然茶湯の表現方法である諸相にも影響を及ぼしてきた。すでにある形式をそのまま享受するのではなく、常に究めようとする意識が働いてきたのである。点前に座禅的効果を見出し、茶会や炭にも仏道を見出した。さらに新たな価値として自然万物の哲理である陰陽五行をも見出すに及んだ。しかし単純に清者たろうとする根本的思想を見失うと、茶禅一味の本来の意味も見失ってしまう。茶の湯修行は単なる行儀見習いとなってはいないか。

主客の気遣いのありようを「道」として論じられることはあるだろう。掛けられた軸に

ある禅語の解釈などから禅を学ぶこともあるだろう。しかし、人間としての有り方・生き方に根底から影響する禅的修行の側面を見失ってはいけない。

結語

本研究では五本の柱から分析を試みたが、それによって近世の茶湯の伝授の大きな流れが明らかにできたと考える。茶湯成立期と現在の茶湯との空白を、より具体的につなげることができたのではないか。

現在行われている茶の湯は、多種多様に行われていた先人たちの夥しい数にのぼるだろう実践的茶の湯から、選び出されてきたほんの一部なのである。その一部のみを、利休時代の茶湯で説明付けることは到底できない。しかし丁寧に変遷をたどれば、利休時代とつながる鎖は明らかに見えてくることであった。

現在では、積み重なった歴史の上に整然とした伝授の形式ができあがっている。これらを習得するだけでも苦労と年月を要するが、これらの形式を尽くすことが目的となってはならない。ともすれば、形式を外れることを間違いとして批判し、他を容認できない狭隘さを生み出すこともある。規定通りの流れが取れそうになくなったとき、いかにして対応をするのかというところをも楽しみの一つとできるような、鷹揚な構えで茶湯に臨んでもいいのではないか。茶禅一味を基とする限り、守りつくすことからやがては離れなければならないのだ。

そして、茶禅一味の根本を忘れてはならない。知識として禅を学ぶのではない、茶湯そのものが禅的覚者に通じる修行形態の一つとなり得るのである。

先人の探究の系譜により至った現在の茶の湯は同じようにつないでいかねばならない。道の探究こそが、茶湯を今日まで牽引してきた根源なのである。時に形式を打ち破り、その上に現れるだろう新たな茶湯を見究め創造を進めるために、本研究が資するところがあれば幸いである。